

## [特別支援教育]

# 発達障害のある児童の自己効力感を高めることで 家庭学習に臨む力の育成

松岡 遼\*

### 1 問題の所在と目的

#### (1) 今日的課題から

文部科学省(2022)の調査によると、「知的発達に遅れはないものの学習面又は行動面で著しい困難を示すとされた児童生徒の割合が8.8%、学習面で著しい困難を示す6.5%、行動面で著しい困難を示す4.7%、学習面と行動面ともに著しい困難を示す2.3%」であることが明らかにされた。これは、児童生徒の約12人中1人は、教室内に教育的支援を必要とする児童がいる計算となり、特別な支援を要する児童への手立てが学校現場において急務となっていることが分かる。

文部科学省(2007)では特別支援教育の理念に、「特別支援教育は、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点に立ち、(省略)その持てる力を高め、生活や学習上の困難を改善又は克服するため、適切な指導及び必要な支援を行うものである」と、特別な支援を要する児童の自立や社会参加に向けた支援の重要性について述べている。このことから、特別な支援を要する児童の社会参加に向け、将来を見据えた継続的な支援や指導の在り方を模索する必要性があると考えられる。

#### (2) 対象児童の実態から

本校は、全校22名の全学級が複式学級の小規模校である。筆者は5、6年生(10名)を担当しており、同学年にも特別な支援を要する男子児童1名(以下:A児)が在籍している。筆者はA児が5年生の時から担任をしている。6年生になってから宿題の提出率が低くなり、課題や係活動や委員会活動を避けることが増えた。特別支援教育の理念である「自立や社会参加に向けた支援」のためにも、困難な課題や自分の苦手な課題にも臨むことのできる素地の育成が必要であると感じた。6年生の4月中旬に行った面談による聞き取りから以下のことが分かった。

#### 【A児の聞き取りの内容】

- ・係活動はやりたくないわけではなくて、忘れてしまうことが多い。しかし、宿題はなかなかできない。
  - ・高学年になってから勉強が難しくなった。特に、国語ができない。どうせできないし、分からないと思うとやる気が無くなる。
  - ・ゲームをやりたくて宿題があることを忘れてしまう。覚えていてもゲームを始めるとやめられなくなってしまっ
- て宿題をする時間がなくなる。
- ・分からない問題があると全てのやる気が無くなって取り組めなくなる。
  - ・中学校までに宿題をきちんと出せるようになりたいし、勉強を何とかしたい。
  - ・(難易度を下げたり宿題の量を減らしたりすることを提案した際) 難易度を下げることで、もっと周りとの差が付きそうで心配。他の人と同じものをやれるようになりたい。

聞き取りから、中学校進学に不安を抱えているが、「どうせできない」「分からない」という気持ちから思うように行動できなくなったり、やる気を無くしたりしていることが分かった。特に、宿題等の家庭学習に課題を感じていた。また、対話から、学習面に大きな課題をもつA児にとって、家庭学習をすることには多くのエネルギーが必要であることが分かった。一方で、「他の人と同じものをやれるようになりたい」という発言や、教師の「宿題ができるように先生と一緒に考えてみる?」という問いかけについて強く頷く様子から、学習へのやる気や自分も周りの人と同じ課題に取り組めるようになりたいという気持ちが強く伝わってきた。

\*上越市立諏訪小学校

### (3) 自己効力感について

A児が家庭学習に臨む力の育成の手立てとして、自己効力感に着目する。自己効力感とは、バンデューラ（1977）によって提唱された社会的学習理論の中核をなす概念の一つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を示すものである。嶋田（2002）は、自己効力感を高めることで困難な状況でもあきらめず努力することができるようになると述べており、A児の「どうせできない」「やる気が起きない」という感覚にも効果的であると考えた。

また、児童生徒の学業達成場面で自己効力感を高める方法に小田（2002）は、1. 目標設定（短期間で達成できる身近で具体的な目標設定を行う）2. 帰属フィードバック（努力に対するフィードバック）3. モデリング（他者の行動や動作を見て模範する）4. ストラテジーの利用（目標を達成するための手段の言語化等による理解）を挙げている。さらに、目標設定をする際、目標をもった児童に対して「君ならできる」という言語的説得を与えることでより効果的だとしている。これらの先行研究を踏まえて、A児に対しても、「家庭学習における目標設定を行う＋言語的説得→達成するための方法を共に確認する→フィードバックする」というサイクルを行うことで自己効力感が向上し、家庭学習に対する課題に臨む力の育成が期待できると考えた。

以上のことから、本研究では、発達障害のあるA児に小田（2002）のサイクルを行い、自己効力感を高めることで「どうせできない」「やる気が起きない」と考える家庭学習に臨む力にどのような影響を及ぼすのか明らかにすることを目的とした。

## 2 研究の方法

### (1) 対象児と実践期間

#### ① 対象児

通常級に在籍する発達障害（ADHDと診断）のA児。発達障害通級には1年生の時から月一回程度通っており、3年生から医療連携を行っている。5年生で行ったWISCの結果から、聞いたことを覚える力の弱さや鉛筆で書く作業への抵抗感の強さが示されている。

授業では、全体での指示を聞いたり文章を正確に読み取ったりすることが苦手ではあるが、個別に説明をしたり図等を扱いながら説明したりすることでよく理解し、通常学級でも問題なく学習を行うことができている。家庭学習の実態として、5年生から宿題の提出率は低く、宿題の量や難易度を調整しながら行うこともあった。特に、国語の学習が苦手で、文章問題や漢字練習の課題は極度に避ける傾向が見られた。

#### ② 実践期間 令和6年5月7日から8月28日（夏季休業明け）まで

### (2) 実施の内容

#### ① 目標設定（翌日に確認できる目標の設定）

「今日ドリルを何ページ終わらせるか」「プリントをどこまでやるか」等、次の日に達成できたかどうか確認できる目標設定をその日に出る学習課題を見ながら担任と共に行う。その際、「君ならできる」等、言語的説得を行う。

#### ② 方法の確認（課題達成の見通しをもたせる）

その日の課題に分からない問題があれば解き方を再度確認したり、教科書やドリルのどこを見ると分かるかを確認したりして課題の見通しをもたせる。

#### ③ フィードバック（教師からA児に対してできたことを褒める）

翌日に目標が達成できたか確認をして、できた場合は、「頑張ったね」等、努力に対する肯定的なフィードバックを行う。できなかった場合は、なぜできなかったか振り返りながら、できるための方法を再検討する。

上記の①～③をサイクルとし、修正を加えながら実施した。

### (3) 検証の方法

#### ① 尺度 福井ら（2008）の18の質問項目と「安心感」と「チャレンジ精神」の2つの因子で構成された児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度を用いて、実践前後のA児の自己効力感の測定を行う。

#### ② 聞き取り 月末に家庭学習の様子についてA児に聞き取りをして心理的变化や行動の詳細を記録し、データとの関連を考察する。



生活の記録		宿題チェック						目標チェック			先生コメント
	「1日の感想・振り返り」では、心に残ったことや思い出を書きましょう。 『宿題チェック』『目標チェック』の振り返りも行いましょう。	ワーク	計算ドリル	自主学習	作文	読書	ギター練習	学習	生活	メディア	
例	今日は、長岡のおじいちゃんの家に行って長岡花火を見ました。迫力があってすごかったです。来年もまた行きたいです。	2p	3p	1p	○	×	×	○	○	○	
7/25 木	すわっこダンスをがんばりました				×	×	×	○	○	○	
7/26 金	計算ドリルを頑張りました	2p	5p	0p	×	×	×	○	×	○	生活記録のコメントも目標チェックも書きましょう。
7/27 土	プールがなかったので、ワークを頑張りました	4p	0p	0p	×	×	×	○	○	○	計算ドリル頑張ったね👏
7/28 日	今日は一日家にいました	1p	0p	0p	×	×	×	×	○	○	ワーク順調に進んでいるね👏 前半には終わるかも？

図2 夏季休業中の生活表

#### 4 結果

##### (1) 尺度の結果

表1 児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度の因子毎の数値

因子	質問項目	A児以外の平均 (N=9)	A児			
			4月	5月	6月	7月
安心感 ・いいえ＝4点 ・どちらかといえばいいえ＝3点 ・どちらかといえばはい＝2点 ・はい＝1点	1.ほかの人と比べて、心配することが多い。	3.33…	2	2	2	2
	2.なにかをするとき、うまくいかないのではと心配することが多い。	3.55…	2	2	2	3
	3.小さな失敗について、くよくよ考える方だ。	3.88…	2	2	2	2
	4.失敗したことやいやなことを思い出して、暗い気持ちになることがよくある。	3.66…	1	2	2	2
	5.どうしたらいいかわからなくて、まごまごすることがよくある。	3.55…	2	1	2	2
	6.なにかをやろうとするとき、色々考えてしまう。	3.55…	1	1	1	1
	7.なにかをやったあと、失敗したと思うことが多い。	3.77…	2	2	2	2
	8.思っていたことと違うと、どうしていいかわからなくなる。	3.33…	1	1	1	1
	9.ひっこみじあんなほうだ。	3.33…	1	1	1	2
チャレンジ精神 ・いいえ＝1点 ・どちらかといえばいいえ＝2点 ・どちらかといえばはい＝3点 ・はい＝4点 ※(14)と(16)は逆転項目	10.やりたくないことでも、一生懸命やる。	3.77…	1	2	2	2
	11.どんなことでも、どんどん自分から挑戦していく。	3.66…	4	2	2	3
	12.計画を立てるときは、きっとできていると思っている。	3.88…	2	1	2	4
	13.なにかをやろうと決めたらすぐにとりかかる。	3.11…	4	2	2	2
	14.ものごとを自分からすすんでやるのは、苦手だ。	3.66…	1	1	1	2
	15.困ったことでも、なんとか乗り越えられると思う。	4	1	3	2	3
	16.目標を立てても、その通りにできない。	3.55…	1	1	1	3
	17.友達よりも、ものごとをたくさん覚えることができる。	3	1	1	1	2
	18.自分は結構できるんだと思っている。	3.33…	1	1	1	3
安心感 合計		31.95	14	14	15	17
チャレンジ精神 合計		31.96	18	14	15	24
安心感・チャレンジ精神 合計		63.91	32	28	30	41
			方策1	方策2	方策3	

\* A児以外の平均の合計は小数第三位以下の切り捨ての合計値

尺度の4月の測定結果から、A児はA児以外の児童の平均(N=9)よりも約半分の数値を示しており、自己効力感が低いことが分かった。また、方策を開始した5月から7月にかけて数値の上昇が見られた。因子毎に見てみると、難しそうに見えることも積極的にチャレンジしようとする精神をもつことの「チャレンジ精神」の数値が特に上昇していることが分かった。



## (2) 日数の結果（目標に決めた課題を次の日に提出できた）

表2 目標達成できた日の日数と割合

	結果/5月の実施日	割合	結果/6月の実施日	割合	結果/7月の実施日	割合
達成率80%以上 (課題を計画通りできた)	1日/16日	6.25%	2日/24日	8.3%	7日/14日	50%
達成率30～80%未満	2日/16日	12.5%	5日/24日	20.8%	3日/14日	21.4%
達成率0%～30%未満	13日/16日	81.25%	17日/24日	70.8%	4日/14日	28.6%
	方策1		方策2		方策3	

目標達成できた日を調査した結果、5月と6月は課題を達成できた日はほとんど無かったが、7月になって達成する日が大幅に増えたことが分かった。また、夏季休業中は、ドリルや作文、漢字練習、自由課題等多くの課題を出したが、苦手な作文や漢字練習を含むほとんどの課題をやってくることができた。

「尺度の数値」と「目標達成できた日」の両方とも5月と6月は横ばいであったが、7月には上昇していることが分かった。詳しい原因を探るため、各月のA児の聞き取り内容を調べた。

## (3) A児聞き取りの結果

## 【5月末の聞き取り】

- ・(ほとんどできなくて)自分が情けないと思う。だめだと思う。
- ・学校で確認しても(何時にするか、何をするか等)家に帰ると忘れてしまう。
- ・宿題しなくちゃと思って、ゲームがしたい気持ちが勝ってすることができない。
- ・ゲームの時間が守れなくて、宿題をする時間がなくなってしまう。
- ・話しているときは「やれそう」とか「やれる」と思うけれど、家に帰ると無理だと思う。

## 【6月末の聞き取り】

- ・前よりもやることやらなきゃいけないことは覚えられた。
- ・先生と話しているときは“できる”と思えているけれど、家に帰るとその気持ちが続かない。
- ・最初はやる気があったけれど、一度できないともういいかなって思う。
- ・計画表通りにならないとできなくなるしやる気がなくなる。

## 【7月末(夏季休業前)の聞き取り】

- ・「やります」って自分で送るとやらなきゃという気持ちになった。
- ・家にいてもやる気になれる日が多かった。
- ・やっていて、結構できるようになってきたから自信になってきた。達成感が強い。
- ・今のところなら夏休みの宿題もやれる自信がある。1日1時間はできそう。
- ・(コメントで)先生も頑張れって言ってくれるし頑張りたい。

## 【夏季休業後の聞き取り】

- ・宿題をもらった時点で、まあまあできそうだと思っていた。
- ・毎年、はじめはやる気があっても中間にやる気がなくなる。今年も、中間やる気がなくなったけれど、後半にもう一回「頑張らなきゃ」と思ってやれた。
- ・(どうして後半にもう一度頑張らなきゃと思えた?という質問に対して)先生が頑張ってくれたから、ここで頑張らなきゃ終わりだなと思った。

各月末のA児の聞き取りから5月や6月では「情けない」「だめ」と自分にに対して自信を無くしていることが分かる言葉を使ったり家庭学習に対しても「無理」「気持ちが続かない」「やる気がなくなる」等、否定的な言葉を使ったりしていることが分かった。一方で、7月末や夏季休業後の聞き取りでは、「自信がある」「達成感」「やる気になれる」「頑張りたい」等、自信をもっていることや夏季休業の課題にも前向きな姿勢を示していることが分かった。

## 5 考察

## (1) 方策1について(5月末の結果)

尺度では、チャレンジ精神の項目が低下しており、2pt以上低下した質問項目は「11.どんなことでも、どんどん自分から挑戦していく」「13.なにかをやろうと決めたらすぐにとりかかる」であり、挑戦することや行動することに否定的になっている可能性が示唆された。また、聞き取りから、計画を立てても自分ができなかった経験から「情けない」「だめ」など自信を無くし、否定的な言葉が見られた。池辺ら(2014)は、遂行行動の達成(成功体験)は、自己効力感を最も強く安定させる情報源と述べている一方、失敗体験は自己効力感を低め、弱め、狭める要因であるとしている。

A児は、計画を立てて失敗した、できなかった経験を多くしたため、尺度の数値が低下したことが考えられる。また、できた日が少なかったことから、担任からの肯定的なフィードバックも減り、失敗してから立て直すことができなかった。休日に続かなくなった要因としては、休日は励まし等（言語的説得）の声掛けができなかったことが要因だと考えられる。

#### (2) 方策2について（6月末の結果）

尺度、課題の達成日共に大幅な変容は見られなかった。聞き取りの中で「家に帰ると続かない」「一度できないとやる気がなくなる」と、家に帰ってから課題に取り組めない様子が明らかになった。池辺ら（2014）は、『言語的説得』だけで高められ、強められた自己効力感は、現実の困難に直面してたやすく消失することが十分あり得る」と述べている。学校で計画を立てている際は、担任からの言語的説得や成功した自分を想起させる声掛けから自己効力感が高まるが、家に帰ると課題の難しさや成功経験をほとんどしていない自信の無さから行動に移すことができなくなっている可能性が考えられた。成功体験が少ないA児にとって、自己効力感を最も安定させる要因の一つである成功体験をA児が実感すること、課題に取り組む直前に励ましをすることで自己効力感の高まりを継続できる手立ての必要性が考えられた。

#### (3) 方策3について（7月末・夏季休業後の結果）

尺度では、チャレンジ精神の項目が上昇しており、2pt以上上昇した質問項目は「12.計画を立てるときは、きっとできると思っている」「16.目標を立てても、その通りにできない※逆転項目」「18.自分は結構できるんだと思っている」であった。聞き取りの「やる気になれる」「やれる自信がある」という言葉からも“自分にはできそうだ”という自己効力感の高まりが予想される。夏季休業後の聞き取りでは「できそうだと思っていた」という言葉から自己効力感がすでに高まっていたことが予想される。その要因として、Google Classroomによる直前までの励ましと課題終了後の素早いフィードバックが有効であったと考えられる。伊藤ら（2024）は、テストや課題に対する良い結果のフィードバックは、能力向上を実感することができることと同時にモチベーションを高めるためには可能な限り早いフィードバックの必要性を述べている。A児も直前までの励ましにより、自己効力感が高まった状態で課題に臨み、できたらすぐにフィードバックを受けることで“できた”という感覚や能力向上を実感できたと考えられる。また、「先生も頑張れって言ってくれるから頑張りたい」「先生も頑張ってくれるから」という言葉から、担任からの励ましやフィードバックがA児にとって家庭学習に臨む要因の一つである可能性が高いことが予想される。

#### (4) 全体考察

方策3から自己効力感が高まった可能性が示唆されたことと同時に、課題達成の日が増加したことや、夏季休業の課題のほとんどを達成することができたことから自己効力感の上昇が家庭学習に臨む力に影響を与えている可能性が示唆された。また、A児にとって自己効力感を高めるためには「課題に取り組む直前に行う励ましのよう言語的説得」と「できたことに対する素早いフィードバック」が有効であり、成功体験を積むことでさらに自己効力感を高め、家庭学習の臨む力の育成に効果的である可能性が示唆された。

本研究では、家庭学習に着目をして学習場面における自己効力感の上昇に着目したが、発達障害のあるA児は学習場面だけではなく生活場面においても自己効力感が低いことは想像できる。今回、学習場面で高まった自己効力感が生活場面にどのように影響するのか、また、生活場面における自己効力感を高める手立て等模索していく必要がある。

## 6 引用・参考文献

- ・池辺さやか、三國牧子「自己効力感研究の現状と今後の可能性」、2014
- ・伊藤瑳紋、白井靖人「大学授業へのゲーミフィケーション導入における報酬のあり方」、2024
- ・江本リサ「自己効力感の概念分析」、2000
- ・小田美穂子「学業達成への援助」『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』北大路書房、2002
- ・嶋田洋徳「セルフ・エフィカシーの評価」『セルフ・エフィカシーの臨床心理学』北大路書房、2002
- ・福井至、飯島政範、小山繭子、中山ひとみ、小松智賀、小田美穂子、嶋田洋徳、坂野雄二「児童用一般性セルフ・エフィカシー尺度改訂版（GSESC-R）の作成」、2008
- ・Bandura, A「Self-efficacy: toward a unifying theory of behavioral change. Psychological Review」, 1977
- ・文部科学省「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」, 2007
- ・文部科学省「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果（令和4年）について」, 2022